

互いに拘束されている」事態を意味していた。また人間の世界内に存在はつねに「他者からの存在」であり、さらに人間の世界開放性も「自由・拘束」の不二・一体として理解されていた。この限りで「ゲマインシャフト」と「不二」は、共に人間存在の根源構造として不二なる関係にあると考えられる。事実、ペーターゼンらが存在から出発する教育学を構築する際には、東洋の叡智に対する確かな眼差しが存在し、同時に峻厳な「主・客分裂」に基づく認識論と「自律」した人間の像を絶えず提供し続けてきた西欧の理想主義の問題点が実存論的・現象学的に究明されていた。

当為からではなく存在から出発する新しい教育学の構築とイエナ・プランによる実践を中核とするその教育的営為は、近代人としての人間存在に顕著な人間性の歪みを直視し、そこに起因する人間の非人間化を克服するための道をゲマインシャフトに立脚した教育に求め、地道ではあるが、穏やかで、着実な内面的改革を通じて「ポスト・モダン」を模索する一つの試みに他ならなかった。

現在ドイツ教育界では、「ペーターゼン・ルネッサンス」ともいべき様相を呈するに至っている。その最大の理由は、ゲマインシャフトに立脚した教育という教育の根源的な在り方を、換言すれば、どれほど精緻な理論・どれほど効率よい方法を手中に収めようと、それ抜きにしては教育とはいいがたいまさに教育の「原理」としてのゲマインシャフトの問題を、最も鮮明に、最も包括的に、したがって最も説得力をもって我々に訴え掛けているからではないだろうか。

## 『悲劇の誕生』における理性の自己批判

大 橋 洋

ニーチェは『悲劇の誕生』において、ソクラテスを典型とする理性主義を痛烈に批判している。これを見ると、我々はニーチェを単なる反理性主義者と看做しがちである。しかし、ニーチェの批判は理性の全否定ではない。ニーチェは、カントの認識批判を高く評価している。むしろニーチェは、カント・ショーペンハアーを引き継いで理性の自己批判を遂行しようとしたとも考えられる。本発表では、理性の自己批判という側面に照明をあてて『悲劇の誕生』を読み、その批判の意味を明らかにしたい。

### 一 ソクラテス主義批判

ニーチェのソクラテス主義評価には、二面性がある。一方ではそれは悲劇の破壊者として、また過度の歴史主義という近代文化の野蛮性の源として否定的に評価される。他方、ソクラテス主義は「実践的ベシミズムに対する抵抗力」であったとする肯定的評価も見られるのである。ニーチェはソクラテス主義を全面的に否定するのでも肯定するのでもない。では、批判の中心はどこにあるのか。それは、ソクラテス主義の知の無制約性、不可謬性信仰にあると思われる。知の無制約性、不可謬性自体は根拠を持たぬ信仰にすぎない。ニーチェの論点はここにある。それゆえニーチェは、カント・ショーペンハアーの認識批判——物自体と現象の区別を知の限界の理性自身による証明として高く評価するので

ある。今や認識は単に現象界に妥当するにすぎないが、現象の知に留まる限り、知による生の善導を説くソクラテス主義は自己貫徹できない。この認識によって科学は芸術へと転換せざるをえないとニーチェは述べ、その象徴として「音楽をするソクラテス」を立てている。しかし芸術とは何か。仮象の制作である、とすれば、真理に関する科学を仮象に関する芸術の内に位置付けることは倒錯であろう。これに意味があるとすれば、ここでは芸術・理性等の言葉の意味が変容していると考えられる。その意味が明らかにされなければならない。

## 二 ニーチェの芸術論

### 1. アポロンの・ディオニュソスの原理

『悲劇の誕生』は、芸術考察の原理としてアポロンの・ディオニュソスのという対概念を用いる。両者はそれぞれ、彫刻に代表される造形芸術と音楽に代表される非造形的芸術の原理であるが、両者はまた、夢と陶酔という生理学的現象として、「人間の芸術家の媒介なしに自然そのものから現れる芸術力」として導入される。アポロンは、夢の中の美しい仮象、知性的明確さ、夢の仮象が仮象であるという自己意識、節度、個体化の原理と、ディオニュソスは、陶酔時の自己忘却、社会規範の消失、自然性、性的放縦、自然の根源的生命力、個体化の原理の解消と性格づけられる。これが人間の芸術家の媒介なしに考察されるのは、ニーチェが、意志と表象というショーペンハウアーの形而上学的図式を前提にし、根源一者(意志)が現象世界を創造し破壊する形而上学的原因としてこの二原理を捉えていることを示している。人間の芸術は自然の芸術の模倣として捉えられているのである。

### 2. 二原理の相互依存性

ニーチェはこの二原理の闘争と和解として芸術の発展を記述する。悲劇以前のギリシア芸術の四段階としてニーチェは、ホメロス以前、ホメロス時代、アジアからのディオニュソスの侵入、ドーリス式芸術を挙げているが、注意すべきことは、二原理は原理としては独立だが、歴史上の芸術現象は、両原理の相互作用においてのみ成立すると考えられている点である。アポロンの芸術であるホメロスもドーリス式芸術もディオニュソスのものの克服、抑圧としてのみ成立する。ディオニュソスはアポロンの芸術を生み出す契機としての現象のうちに現れる。

悲劇の考察においても、この相互依存関係が具体的現象においてどのように現れるのが問題となる。

### 3. 美的現象

悲劇はギリシア芸術の最高峰と考えられている。ここでは相反する原理であるアポロンとディオニュソスが、奇蹟的結合を果たしていると看做されている。両者はどのように結合しているのか。両者の結合はアポロンの仮象の仮象性の自覚による。悲劇はアポロンの仮象を示すと同時にその仮象性の自覚によって、仮象の背後にあるディオニュソスの根底を示す。アポロンの仮象によってディオニュソスとの直接的な一体化から免れると同時に、それが仮象にすぎず、根底を隠蔽しているという意識を伴うことによって、逆説的に根底を感得させる。このような形で両者は悲劇において協働しているというのである。「生存と世界は美的現象としてのみ是認される」と言われる時の美的現象とは、単に美しいものではなく、悲劇に現れているような、美しい仮象を示すと同時に仮象性の自覚を伴うことで、根源を現わしめる現象である。単

なる現象としては生存と世界は是認されない。仮象性の意識という自己批判的契機を含み、それによって根源を示す美的現象である限り、初めて個別的生存と世界も是認されるというのである。ニーチェの芸術論は、美的現象に芸術の真価を見る。「芸術は仮象を仮象として扱う。つまり、錯覚させるのではなく、それゆえ真である」という遺稿の言葉にニーチェの芸術観、真理観が集約されている。自己批判的契機を含むことで美的現象は一種の真理性を持つのである。

それ自体仮象である概念的思考が、仮象性の意識を失い、無制約性、不可謬性信仰に陥っているために自らの理性としての性格を裏切っているというのが、ニーチェのソクラテス批判であった。その仮象性が明らかになる時、科学は自己目的でありえない。そこでニーチェは科学に代わる最高目的として智慧を立てる。智慧とは、個別的現象の認識を超えて、存在全体を捉える働きである。芸術において働いているのも智慧に他ならない。科学は、仮象性の自覚を取り戻すことによって、それを超えて働く智慧に奉仕するものとして相当の意味をもつ。ニーチェのソクラテス主義批判は、智慧という高次の理性の立場から、概念的思考のみを理性とする理性概念の狭さを批判するものだったのである。

## 宗教学の問題としての millenarianism

山本和人

millenarianism (一般に「千年王国論」「至福千年説」と訳されることもあるが、以下では「千年王国運動」とする)は、新約聖書ヨハネ黙示録の章句に基づく、キリスト教に於けるある種の信仰・思想・運動を指す語である。ところが一九六〇年代前後より、文化人類学の知見から非キリスト教文化圏でも類似の宗教運動が指摘されだされ、広範な比較宗教学の素材を提供する可能性さえ窺えるようになった。同時に、多様な対象への適用と様々な学問領域でコンセンサスなしに用いられたために、その含意が不明瞭になっていく。小論では、このような状況を俯瞰的に整理し、多様な宗教現象を「千年王国運動」と呼ぶ意味を考察してみたい。

ヨーロッパ中世のキリスト教が支配する時代に、下層民衆の迷信的信仰から生じた運動、或いは抑圧された貧民の暴動としてそもそも解釈されてきた千年王国運動は、中世史研究の進捗と共に、その高揚期がむしろ近世に近い、または近世に入ってからの方が隆盛するという事実が歴史学者の N・コーン (Norman Cohn, *Pursuit of the Millennium*, 1957) 等によって指摘されるようになった。終末と救世主の信仰がユダヤ教に起源をもち、更にゾロアスター教に遡り、古代ローマやイスラムにも同様の信仰があることは夙に知られていたが、単純な観念の伝播ではなく、そういった信仰の受容者の主体的反応が考究されるようになるのもこの頃である。そうした中で、十九世紀末に起こった北米原住民のゴー